Special Interview vol.2

スペシャル インタビュー

5月9日に行われる予定だったハーモニーホールふくいでのスターダスト☆レビュー（略称スタ☆レビ）。このコロナ禍の中、中止となってしまいました。スタ☆レビのメンバーやスタッフの皆さんからもとても残念だ、とのメッセージを頂いています。

公式ガイドブック『一期一演』にも掲載されたスタ☆レビの根本要さんのインタビュー。実はもっともっとたくさんの内容をお話いただいていました。そこで、根本さんのインタビュー完全版をここにお届けします。

ノンジャンルだからこそ愛され続ける、スタ☆レビの音楽

—よくスタ☆レビの音楽はノンジャンル、と言われますが、根本さんご自身はどんな音楽に影響を受けてこられたのでしょうか？

僕らは、現役時代のビートルズを知っている最後の世代なんですよね。来日の時にテレビにかじりついていた小学生でした。もちろんそれ以外にも、当時から凄いバンドはたくさんいたんです。そのひとつがローリング・ストーンズ。僕には兄がふたりいて、たまたま上の兄からビートルズを、下の兄からローリング・ストーンズを教えられました。だから、ちょっとポップなロックンロールも泥臭いリズム＆ブルースも、小さい頃から両方聴いて育ったわけです。僕が聴いてきたそういういろんな音楽が、スタ☆レビの音楽の中に入っていると思います。

僕はよくお客さんに「スタ☆レビだけしか聴かない人は損をしてる」って言ってるんですが、僕らがエリック・クラプトンからロバート・ジョンソンを知ったように、スタ☆レビを通して僕らに影響を与えた音楽を知ってほしい。それが音楽の楽しみ方のいいところだと思っています。

—そんなスタ☆レビ、結成とデビューのいきさつを教えてください。

スタ☆レビは地元、埼玉の熊谷市でアマチュアのバンドをやっていた仲間です。実は僕、他にもいくつか掛け持ちでバンドをやっていて。たまたまそのうちの2つのバンドが同じコンテストに出てて、「じゃ一緒にやっちゃえ！」って出たのが1979年のポプコン（ヤマハポピュラーソングコンテスト）でした。そこで優秀曲賞をもらい、多少自信も出て、いくつかのコンテストに出た時に審査委員をされていた鳴瀬さん（鳴瀬喜博。現カシオペアのメンバー）がすごく気に入ってくれて、レコード会社にもいくつか行きました。それも自信になってライヴ活動を続けているうちに、ワーナー・パイオニア（現ワーナーミュージック・ジャパン）のディレクターの深川さんに出会い、デビューが決まりました。その方は本当にスタ☆レビの音楽を気に入ってくれて、当時は「アレレのレ」ってふざけたバンド名でしたが、デビューで色々手直しされるバンドが多い中で、僕らはバンド名以外は（笑）、ほとんどそのままレコーディングさせてもらいました。これは本当に嬉しかったですね。色々な音楽の影響から生まれた僕らの音楽を面白がってくれてたんでしょう。

—1981年にアルバム『STARDUST REVUE』、シングル「シュガーはお年頃」でデビューして、来年で40周年を迎えられます。

メンバーは誰一人正式な音楽教育を受けてきたわけじゃないし、卓越した音楽性があったわけでもないし。おそらくこれだけ続けられてきたのは、ひとえに“運”じゃないですかね（笑）「継続は力なり」って嫌いな言葉だったんですが、今や自分たちがその恩恵として存在してるのかもしれませんね。ずっと「長い間やれば、それでいいのか」という考えだったんですけど、実際長くやってれば練習も必要になるし、経験値もあがるし、それなりに上手くなれるんですよね。それでも実感するのは、音楽って有名無名で明らかに伝わるものが変わるってこと。スタ☆レビはそれも利用しつつ、極力「正味のもの」をお見せしなきゃという想いでやってます。ついつい有名ってことだけで敷居が高くなる業界で、他と違うそういう部分が浸透してスタ☆レビはお客さんに信じてもらってるんだとは思います。だからスタ☆レビって大ヒットもしてないのに、お客さんの中だけのヒット曲がたくさんあるんですよ（笑）

ハイトーン・ヴォイスの秘密

—スタ☆レビの魅力のひとつに、メンバーのコーラスの美しさ、特に根本さんのハイトーン・ヴォイスがあると思います。

小学生の頃からダミ声しゃがれ声って言われてて、ずっとこの声なんですよ(笑)。ただ声は変わらなくても、喉の状態は変わってきますね。20年前に、リハでは声が出るのに本番で高い声が出なくなった時があって、その時もずっとライヴをやっていたんですけど、調子いい時と悪い時を比べているうちに「無駄な力を抜くことが大切」ということが分かってきたんです。だから僕ら、本番前には「気合抜き」をするんですよ(笑)

それと自分の声を理解することも大事です。例えばオペラ歌手がアコースティック・ギターだとしたら、僕らの声はエレキ・ギター。マイクを通してアンプで増幅された声なんです。だから加工されやすいように安定した声を出すことも大切です。高い声を出す時って大きな声になるので、ついついマイクから離れてしまうけど、小さい声でも高い音が出るように声をつくる。どんな声でもマイクと口元の距離を変えない。だから一番重要なのは、感情に任せて声に極端な起伏をつくらない、ということです。

—歌う時にはどんなことを考えているんですか?

間違えないようにしてます(笑)

音楽は、歌詞とメロディでできています。そこに余計な感情を入れるとtoo muchになっちゃう。歌詞の内容をメロディが表現しているならば、歌い手は、その音楽を綺麗にトレースしていくことが一番重要なんです。

—今でもカラオケに行くと伺いました。

カラオケでも研究してますよ。60歳なのに5歳並みの探究心って言われます(笑)最近、ミニー・リパートンのホイッスル・ヴォイスが使えるようになってきて。あと、レイラ・ハザウェイが来日公演でホーミー(二重声)をやっていたんで真似してみたり、古くは大学の頃初めて観たアル・ジャロウがヴォイス・パーカッションを披露していて、すぐにそれを真似てみたり。とにかく、声で遊んでる。年齢に関係なく出る声は見つけられるんです。

クラシック音楽もジャズも吸収する、スタ☆レビというジャンル

—スタ☆レビのア・カペラが好き、というファンも多いようですね。

2018年9月に、世界遺産でコンサートを企画制作しているチームからオファーを頂いて、群馬県の富岡製糸場で弦楽四重奏とのジョイント・コンサートを行いました。その時ア・カペラを披露したんですが、実は僕らの中で、ア・カペラは重要なテーマのひとつなんです。何しろア・カペラのグループでもないのにア・カペラのアルバムを出している、という世界でも珍しいグループですから(笑)

—実際にスタ☆レビのア・カペラを聴くと、その同質性というか、同じような音楽のつかまえ方をしていらっしゃるなと感じます。

そうですね。なぜ僕らがア・カペラをやるか。それこそが答えです。楽曲があり、ギターが必要だからギターを使う。ピアノが必要だから、ドラムが必要だからでアレンジを考えるわけです。同じように、この曲は声だけなら面白いかも、というのがア・カペラの発想です。とはいいつつ、僕らはア・カペラグループじゃないので、とことん練習するし、今でもお互いにアドヴァイスしあうんですよね。ちょっとプロっぽくない、高校のクラブ活動みたいな感じなんですが、そうやってコーラスをつくり上げてきたので、そう感じられるのかもしれません。

—クラシック音楽ファンにもスタ☆レビの音楽は大いにアピールできると思います。

そうなったら嬉しいですね。とにかくどんな音楽も興味があるので、クラシックなんかできないけど「クラシックっぽく」、ジャズなんかできないけど、「ジャズっぽく」。そういう「ぽく」がスタ☆レビなんですが、それってロックのヴァイタリティそのものなんですよね。ビートルズをはじめとするロックの探求者たちは、ロックやポップスにこだわらずいろいろなジャンルに挑戦し、そこから貪欲に吸収して新しい音楽を作り出していった。なんでもアメーバのように取り込んできたところにロックのエネルギーがあるわけで、そういう意味では、僕は根っからの「ロック人間」なんだと思います。